武蔵野日曜特別講筵

『羔の婚姻』（下篇）「饗宴」
――中篇「新婦」第30歌から下篇「饗宴」まで――

１９７３年２月４日
小池辰雄

解題（下篇「饗宴」）　中篇「新婦」第30歌「産痛」　第31歌「起きよ」　第32歌「幻滅」、第33歌「地はおののく」、第34歌「開けたる門」、第35歌「微温」　第36歌「呻き」　下篇「饗宴」第1歌「雅楽」、第10歌「棕梠」、「続稿（断章）」
（参考一）夫人の死と『羔の婚姻』
（参考二）『羔の婚姻』解説

●解題（下篇「饗宴」）

新郎既に全く、新婦備え成る。従って本篇の主題は羔の婚姻の成就、その祝宴、その栄光である。第1歌は例の如く序曲にして、羔の婚姻の饗宴の日と共に夫人との再会の日又近づくことの感懐を述ぶ。以下黙示録の詩というべく、先ず第2歌は二十四人の長老と四つの活物（いきもの）の神を讃美する歌（第4章）、第3歌は神のみこころにある万物革新の記録たる解封（第5章）、第4歌以下は黙示録第6章以下に相応じ、この解封によりて啓示せられたる世の終末の荘厳なる光景を歌う。即ち来るべき者来り鉄の杖もて世の改造を成し就ぐるための四騎士、羔の審判の怒、神の僕たる者の識別、新婦を迎えん為に羔再臨の発途、復活のラッパ、羔の婚姻の将に成就せんとするを嫉むサタンの暴虐、世界各地より救われし者各々勝利の象徴たるの棕梠の枝を手にして聖なる神の都への大集団、次で地上にては第七封印の解封による沈黙と審判、第五の天使のラッパによる第二の審判、此の世の君偽キリストたる獣と「六百六十六」たる今一つの獣との出現、羔のものと獣のものとの選別と審判の利鎌（ときかま）による叛逆（はんぎゃく）の徒の芟除（せんじょ）――これにて第15歌を終る。之に次ぎ、第七の天使のラッパを叙する続稿4連12行にして、著者のペンは地に落ち、霊は天に凱旋した。別稿は神の国と羔の権威とに対する讃美と歓喜の歌である。――編者

●中篇「新婦」第30歌「産痛」

藤井武先生〔1888/1/15～1930/7/14〕の『羔の婚姻』という詩は、読み返してみると、全く日本では独特のものだし、また確かに世界的な独一のものであることを感じます。
今日は中篇「新婦」の第30歌「産痛」というところからです。日本の精神史がここに概観されて歌われている。34行に、

22　蜻蛉（あきつ）の日女（ひめ）が産（うみ）の褥（しとね）に

劬労(くるしみ)をなすやすでに久しく
けふまでおよそ二千五百年。
……
34　母なる宇宙が今にしてなほ
子なる自由の宇宙を産むと
声なき呻吟(うめき)を已(や)めぬごとく
37　彼女も時みち真理をかかげて
東に西に照りわたるべき
新しき日本を産まんがために
40　住所(すまひ)を大和島根にうけし
最初(いやさき)の日より小止(をや)みもなく
その苦しみを続けてぞ来た。

「彼女」というのは――22行に「蜻蛉(あきつ)の日女(ひめ)」と書いてある――日本のことです。「あきつしま」と日本のことをいう。「ひめ」というのは元々、「日の女」と書くんですね。天照大神(あまてらすおおみかみ)は女性ですから。ドイツ語でも太陽のことは「ディ　ゾンネ」(die Sonne) と、女性形でいう。

「そのあたたまりを被らざるものなし」

と、詩篇19篇にあるように、温めてくれるという愛の面が非常にあるわけです。それで女性というようなことになっているかと思う。「天照大神(あまてらすおおみかみ)」というような民族神を民族神として考えることは何も、私は大きな立場からどうということはない。神さまはもちろん、キリストに顕れた神を私たちは唯一の神としますけれども。「神々」というような存在が他に在ったっていい。これはモーセの十誡にも、

「他の神々がそれぞれの民族にはある。ただ、お前にとってはヤーヴェーの神だけだ」

というのですが、クリスチャンにとってはもちろんイスラエルに顕れたヤーヴェーの神をただ拝んでいるのではないので、ヤーヴェーの神としてイスラエルに示現したところの創造の神と、そしてキリストにおいて特に顕れた神という、そういうことですから。世界観的に、宗教哲学的に考えたら、信仰の世界というものは、結論は出てこない。我々は、キリストに自ら顕れたもうた神の他は、信仰の対象としてはありえない。

しかし、それぞれの民族神といかに関わるかということは向こう側の話でね。それは一つの民族神として考えることは、歴史的な事実なんだから、いくらそれが神話であろうと何であろうと。神話であろうと何であろうと、歴史的な事実はやっぱり、歴史の中に神話というものは生じて来たんですから、それはそれとして。

ただ自分の信仰の対象とならないだけの話で、一応それに敬意を表するということは、

何も私は悪いことではないと思う。どうも、そこらがクリスチャンというのはえらく狭くて、神社の前に来ても、お辞儀しないでそっぽを向いているようなのは、どうかと思うんですがね、ああいうことは。それを礼拝することと、敬意を表することとは別問題です。敬意を表するということと、それを信仰の対象として礼拝するということはちゃんとけじめをつけて、大きな気持ちでいればいい。そういう「蜻蛉（あきつ）の日女（ひめ）」の、

34　母なる宇宙が今にしてなほ
　　子なる自由の宇宙を産むと
　　声なき呻吟（うめき）を已（や）めぬごとく

というのは非常に素晴らしい句だと思っています。それから43行に、

43　正義を象（かたど）る「天照す」日と
　　名にし負ふ明るき女性にまづ
　　おのが理想を彼女はもとめた。

「彼女」というのは「蜻蛉（あきつ）の日女（ひめ）」即ち日本は、「正義を象（かたど）る天照す日」という。天照大神というのは、「正義」ということを、藤井先生はまず「義」ということをそこに考えた。それから、清浄観念ですね。まぁ、あと岩屋のことも書いてありますが。

それから、国体の方に多少きまして、それの「天孫」ということになりますから、それで天皇のことになってくるわけです。

55　またはおほきみを神としあがめ
　　天雲（あまぐも）たかきいかづちの上に
　　庵（いほり）むすぶとまぼろしを見て

58　海ゆかばただ水つく屍（かばね）
　　山行かばただ草むすかばね
　　ひとへに君のへにこそ死なうと

61　ちかひは上なき誠ながら
　　至高者（いとたかきもの）に君はあらねば
　　幻いつまでか消えずあらう。

この集会の中には戦後の方がたくさんいらっしゃるわけです。だから、「天皇陛下」なんて言ったって、だいぶ、我々明治の人間が「天皇陛下」ということを思うのと多少違う。今の若い人たちと感覚が違うわけです。天皇陛下のことを「天チャン」なんて言っているんだから。とにかく、私たちは小学校で天皇陛下と皇后陛下の写真には最敬礼したものだ、いろんな式があると。ちゃんと始めに幕がかかっている。そして、幕をズーッと開くと、天皇陛下と皇后陛下の写真が並んでいる。その写真が現れると最敬礼する。全く礼拝式ですよね。そして、「朕（ちん）思うに……」という勅語（ちょくご）が始まると、みな頭を少し垂れて承ったものです。そういうのが昔の日本人の在り方だった。ああいう一種の絶対性だったものだから、

ある意味において思想が展開しないわけだ。それは確かに、戦争でぶっ壊れたあと、そのためにプラスになった面はありますけれども。

天皇陛下は「現人神（あらひとがみ）」というわけだ。ちょうどキリストが神の現人神なんだ。キリストは神人なんだ。キリストと同格になってしまうんだ、昔の考え方では。

「天皇とキリストはどうだ？」

なんて、やられるわけですよ、クリスチャンはそういう意味においては。しかし、いろいろ歴史というものは相対的なものですから、厳密には言い切れないでしょうけれども、とにかく、万世一系として皇統連綿たるということは、歴史的な相対的な事実なんです。ですから、それを神格化したところに行き過ぎはありますけれども、国の「お父（と）っちゃん」という意味で――明治天皇が国民のことを「赤子（せきし）」と言った――大きな親子の関係、大家族という関係で、「お父っちゃん」ということ。フリードリッヒ大王は「お父っちゃん」と言われた。あれは偉かったから。非常に人民のことをよく考えてくれたから。

憲法の方でも「象徴」ということになっています。象徴というのは、そういう意味で国は大家族で、その「お父っちゃん」としての象徴という。神格化するわけではない。そういう気持ちを楽に持つことは何も悪くはないと思う。政治的な権力は今はあるわけではないですから。人間的に天皇陛下も親しんでくださって、そして、こちらもその「お父っちゃん」として敬意を表するということがいいだろうと思うんですが。

「全然あんなものはどうのこうの」と、すぐ考えたり、「あれは税金で生きているんだ」とか何とか、すぐそういうような考え方をすることはいかんですよ。そういうものではない。やはり、歴史的な伝統というものは、日本はユニークなんだから、そういった意味において歴史的な伝統を持っている。イギリスの「キング」（King 王）とも違う。そうしたユニークをもっているものを、やはり日本人としての誇りを持っていいはずなんです。いわゆる皇族の傍系的なものや、あるいは華族というものは今はなくなりましたから。

そういうわけで、これは柿本人麻呂（かきのもとひとまろ）ですよ、55行から。

55　またはおほきみを神としあがめ
　　天雲（あまぐも）たかきいかづちの上に
　　庵（いほり）むすぶとまぼろしを見て

というのは、

「おほきみは神にしませば天雲（あまぐも）の雷（いかつち）の上に蘆（いほり）せるかも」

という人麻呂の歌です。「神にしませば」とちゃんと言っているんだから。天皇陛下は「大君（おおきみ）」ですね。大体、「天皇」という言葉自身がもう完全に神格の言葉です。今は本当は、「天皇」という神格の言葉を残しているのが、文字から言えばちょっとおかしいわけです。「上帝」、あるいは「天帝」なんていうと、みんな支那でいう神さまと同質的な言葉ですから。漢文の聖書には多分、神のことを何かそのような言い方をしてある。

「天雲(あまぐも)の雷(いかつち)の上に蘆(へ)せるかも(いほり)」というから、素晴らしい歌ですよ、歌としては。実に崇高な歌です。それを先生はここに持ってきたわけです。それから、大伴家持(おおともものやかもち)の歌、

58　海ゆかばただ水つく屍(かばね)
　　山行かばただ草むすかばね
　　ひとへに君のへにこそ死なうと

というのは、

「海ゆかば水つく屍　山行かば草むす屍　大君の辺(へ)にこそ死なめ顧みはせじ」

という和歌です。

「大君の身辺でお護りして自分はその盾となって死のう」

と。これは戦争中よく歌ったものだ。憶えていらっしゃる方もあると思いますが。……

61　ちかひは上なき誠ながら
非常な命を賭けての誠、これは忠誠だね、正に。忠誠を尽くすわけです。
　　至高者(いとたかきもの)に君はあらねば

即ち、大君は至高者ではないから、

　　幻いつまでか消えずあらう。

「そういったような神格化した幻はいつかは消える時が来よう」

と、先生はこう歌っている。まだこれは戦前の話ですから。しかし、「この考えは行き過ぎだよ」ということを、先生は既に預言しているわけです。「いつかは消える時が来るだろう」と。これは戦争で引っくり返って消えてしまった。藤井先生が亡くなったのは１９３０年だから。「本当はこれではいけない」と、それはもう我々もそう思っていました。ただそれはおおっぴらになかなか言えなかった。

64　新に見いでし真珠のごとく
　　大慈大悲のおとづれを受けて
　　彼女のわかき瞳は燃えた。

「彼女」とは日本のこと。これは仏教が伝来して来ましたから。１２１２年か。

67　うつりゆく世のものにはあらぬ
　　浄土にかよふ道としきけば
　　依りたのむべき光はこれと
70　その手を安くかれに付(わた)して
　　何処にもあれみちびくままに
　　羊のごとく彼女は従うた。

これは一番先は聖徳太子から始まるわけです。

「あつく三宝を敬え」

というようなことを聖徳太子が既に憲法の中で言っている。仏・法・僧ですね。

「和をもって貴しとなす」

と。それから、

「群卿百寮、礼を以て本とせよ。民を治むるの本は礼にあり。」

という、礼のことも言われている。秩序です。秩序が行き過ぎてしまって封建的なものになるんですけれども。「孝経」という本がある。そこは特に礼。それから「礼記」という本もあるから。これは秩序のことです。今はこの秩序がなくなって、悪平等になってしまって、これまた困った民主主義だ。まぁ歴史というのは右に振れたり、左に振れたり、しょっちゅう曲線を描いているんだな。

私くらいの年配になるとね、大体もう達観してしまうんですよ、世の中を。それでもう、どうせ――「どうせ」なんて言うと悪いけれども――大したものはないですよ、本当の偉いやつなんていやしないですよ――まぁたまにはいますけれども――日本の政治家でも本当の第一級はいないものね。

第一級なのはやっぱり、哲学宗教の世界に本当に打ち込んだ魂でなければダメです、政治のことだって。妙なものだね、スポーツだってそうですよ。スポーツの世界でもやっぱり最後のところは、そういった魂の迫力がなければ、最後のところの妙技は出てこない。何でもそうです、芸術でも、学問でも何でも。だから何をするにしても、

「人間の全ての営みの根底は魂の世界が本当に死に至るまで鍛えられるかどうか」

というところにかかってくる。

仏教の世界ですけれども、最澄、空海――最も澄む、空と海という名――仏教の方の言葉には全くちょっと聖書はその点では適わないような、漢字の味というものは何とも言えない。聖徳太子も偉かったけれども、この伝教大師ですね、比叡山に行くと根本中堂が建っているあの最澄です、天台宗の。これはある意味においては日本の最大の坊さんだったかも知れません。天台、真言、あと日蓮にしろ、何にしろみなこれが比叡山に一応行くんだから、一番これは本当に根本中堂なんだな。この最澄は生まれた時に不思議なことがある。そういうことが書いてある。やっぱり不思議な現象があった。これは単に後から作ったものでは恐らくないでしょうね、生れからしてちょっと違う。天台、真言、それから源信、法然、親鸞とくるわけです。藤井先生も全集の第2巻の501頁からあとに書いてありますから、あとで読んでみてください〔註：藤井武全集第2巻／聖書より見たる日本／第二　旧約の日本／本論の二　日本特有の信の消息／一　源信の浄土幻影、二　法然の専修念仏、三　親鸞の本願回向〕。

これはいつか私が「白熱の魂」という詩を書いて――今は「本願道」〔註：著作集第1巻『無者キリスト』（初版）／第七章　天鐘詩集（一）／本願道〕という題に直しましたけれども――そこにずっとその経路を簡単に歌ってありますので、また読み返してみてください。

その次は武士道のことが出ている。

73　しかしそれはた「光」ではなかった。

光について証明をなすべき　76
斥候らのひとりに過ぎずして。
柔和をほまれの女性ながら
胸のあたりにひそませ佩ぶる
一振したたるごとき懐剣。　79
いかなる工匠の秀作にか、
触れなば魂も断ちかねまじく
銘してことに「武士道」と呼ぶ。
さながらおのがたましひのやうに　82
彼女は愛でてこれを懐いた。
しかしそこにも「生命」はなかった。

忠道といいますかね、君臣の道。これは忠誠です。武士道もやはり主君に対する忠誠を尽くしていく。義のためには命も棄てるという世界は素晴らしいんだけれども、そこには本当の生命がなかったというわけです。

しかし、真理が、日本の歴史でもって段々そういうように一つ一つ大事な真理が開示されて行って、ただそれを捨てていくのではなくして、それぞれのもつ本質的な善さというものを、日本の精神史というものをしっかり認識して、それを総合するものがこの福音であるという見方を我々はしていかなければならない。天皇陛下を現人神と見ることは行き過ぎであるけれども、しかし、あの忠誠、即ち天皇とか、あるいは主君のためには命も惜しまないという、

「義は泰山より重し、命は鴻毛より軽し」〔義は山嶽より重く、死は鴻毛より軽し〕

というんだけれども、そのような心の在り方というものは、神・キリストに対するクリスチャンの在り方――殉教者の心はみなそうですから――それと通ずるものを持っているわけです。だから、対象が今度は神・キリストになると、

「クリスチャンはそれだけの在り方をしているか」

ということになりますと、今度は実践面からいうと、昔のそういった実際そこに生きた人たちは、ある意味において徹底したものを持っていますから、へたするとクリスチャンはそれより以下のクリスチャンがたくさんいるわけだ。

我々ももちろんそのことにおいて真剣に歴史の精神史を見返して、善きものはちゃんと認識して、それを福音の角度からしっかりと把まえて伸ばしていく、深めていく。それは福音というものはそれだけの大きさと深さと高さを持ったものですから。そうなると、福音の世界はただならぬ世界であることを思うわけです。藤井先生が日本の精神史を顧みて、

「それは旧約であって、やがて福音を入れてそれを全部活かしていく」

という気持ちで書いておられる。決してこれをただ否定しているわけではない。認めつつ、

なおその限界を見て進んでいくと、こういうわけです。
それから第７連になると、儒教のことが出てくる。

85　真珠とひとしく隣人より
　　かねて受けしは黄金の匣か、
　　おほよそものを「をさむる」の度。
88　その名をあるひは「仁」ととなへて
　　煉りきよめたる精金にまがふ
　　誠ごころを本質とするもの。

儒教は、極まるところは仁である。仏教は慈悲ですけれども。武士道は忠誠。主君の道は義だね。仁でありながら、私たちが小さい時から教わってきた孔子の儒教の道は、教え方が少しズレていたと思う。むしろ、儒教の方でも、道徳としての、人倫としての義の面がやっぱり強く教わったような気がする。仁ということが強く出てこない。だから、実は儒教なんかも本当に把まえていないわけです。

我々が今、新しく孔孟の教えを読むと、福音の世界から読むと、なかなかこれは素晴らしいなぁということは、仁とか恕とかいうこと、思いやりです。さっきコリント後書を読んだときに「慰め」という言葉がたくさん出てきましたが、そういった本当に慰め深き世界。そういうものの前段階をなすものを持っている。孟子の教えでも一番先に、

「惻隱の心無きは人に非ざるなり」

と書いてある。「惻隱」というのは人のことを思う、思いやること、思いやりの世界です。

「惻隱の心は仁の端なり」

ともいう。仁の始めである。惻隱の心、人を同情する、思いやる。「気の毒だな、可哀相だな」と思う。そういう心がないものは人間ではない。そういった心は本当に人を助けるところの仁の、愛の始めであると。はっきりと「人に非ざるなり」と孟子が言っている。
そういうような掴み方が、福音の世界に入ってくると、その真意をもっと深く掴むことができるわけです。だから、我々は何を読んでも楽しいというのは、みんなそれを本当に活かしてしまうから。ただその批判をしない。批判的な、すぐ切ってしまうようなのはダメなんです。その善さを、インチキでないものはみんな認めて、それをどのように活かしていくか。これが本当の大乗的な真理を身につけている在り方なんです。

それから、国学のことが出てきまして、

100　おのづからものの影をうつして
　　昔ながらに澄みわたりたる
　　鏡よ、「古道」と銘もふるく。

と。これは、一番先は賀茂真淵それから本居宣長、平田篤胤、この三人だね。賀茂真淵の言葉に、

「ただ何事も本つ心の直きに顧みよ」

という言葉がある。「本つ心」は本心ですな。古道、神道ですね。これは神道をまた再認識した。けれども、内容的にはそう深いものはなかったわけです。

儒教の方で、特に身証者といいますか、研究しまた実践したご連中は山崎闇斎とか、中江藤樹、熊沢蕃山、伊藤仁斎、二宮尊徳、貝原益軒というようなご連中です。近江聖人といわれるのは中江藤樹だ。中江藤樹の書いたものを私はいつか少し読んだら、まるでヨハネ伝を知っているような言葉で非常に驚いてしまった。熊沢蕃山もなかなか変わり者です。

127　「律法はモーセによりて伝はり
　　恩恵と真理はキリストによりて
　　来た」と老使徒の告知のやうに

130　十字架のうえに彼が流しし
　　血による新しき契約の
　　大いなる恩恵の真理のために

133　途を備へしは旧き契約――
　　罪にとぢこむる義の律法と
　　陰影ろふ信の律法とであった。

136　新約の日本はまだ生まれない。
　　しかし準備はすでに整ふ、
　　その旧約の試煉は満ちる。

139　岩戸に入りし「天照す」日より
　　古鏡にまがふ「ふるき道」まで
　　ゆたかなる義の律法のほかに

「罪にとぢこむる義の律法と陰影ろふ信の律法」

といったのは即ち、

「儒教も仏教も結局つまるところは、まだかげろうの信の律法であり、義の律法である」

というようなことをここのところで先生は言っているわけだな。

142　珍らし、ひとへに本願をたのみ
　　浄土を恋ふる信の律法よ、
　　純さは世にも類なくして。

145　ああ産痛まさに終ろうとする。
　　産めよわが日女、今こそ活ける
　　真理をむかへて、かがやく日本を。

これはさっき言った源信の『往生要集』という、浄土を恋い慕うところのもの。それか

ら最澄・空海の天台・真言です。これも難行道から脱却して信仰一本の易行道を開示してきたわけです。難行道はまだ最澄・空海の方にはあった。あったけれども、源信になるとそこが抜けてきた。そして、源信がちょうどその中間になって、それから法然・親鸞になると、完全にこの本願道になってくるわけです。だから、浄土を願うこちら側からの悲願に対して――それが源信です――法然・親鸞になると今度は本願の方が強くなってきて、

「弥陀の本願の深きが故に、頼まば必ず往生す」

という角度が本然・親鸞です。ちょうどその中間になってくるのが源信。しかし、天台・真言の中には難行道はあっても、また非常に密教的なところがあるから、合一、一如の世界ももっている。ですから、天台・真言のところはその一如的な面はまた素晴らしいところを持っていますから、決してただ難行道としてそのまま片づけてしまうわけにはいかん。ただ密教的な境地に入る、そこにひとつの難行的なものもあるかもしれませんけれども。それに対して、そういったことではなくて、もっと単純に本願に依り頼むというところ、そこで「南無阿弥陀仏」というところに帰するわけです。法然の『一枚起請文』なんてのは正に非常に簡単にそのことが書いてある。法然の『一枚起請文』のある一ヶ所を読むと、

「もろこし、我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず、また学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず、ただ往生極楽の為には、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の仔細候はず……唯一向に念仏すべし。」

「念仏一向」というのはそのことです。ただひとえに念仏するだけだと。「仏を念ずる」という、「念う」というのは魂の奥底でもって思う。念仏すると同時に一如の世界に入る。私たちもそうですよね、

「キリストよ！」

と念仏するわけだ。そうすると、キリストと一つになる。

その根底には、我々の信仰では十字架がありますから、そこが違う。十字架の贖いによって確実に救われる。そこは仏教でいうと、大慈大悲、本願の大悲が来ているから。念仏すれば、こちらの煩悩いかんにかかわらず、救われるということです。どっちにしても、人間の側の条件が付いているうちはダメだと。無条件の世界です、どちらにしても。ただ無条件の在り方が違う、内容が違うだけの話です。

キリストの救いの世界では、十字架によって――これが本願の徴だから、実証だからね――そして聖霊が、十字架と聖霊が福音の本願の内容です。だから、「主よ」という。「主よ」と言う時に、十字架と聖霊の降臨が同時に入ってくる。人間というのはしょうがないからね、もうその他に道はないですよ。

あとはやはり、易行道といったって、それは難行もあるんです、現実には。我々もやはり努力精進も、ある意味においてしなければダメですよね。

「もう私は信じたから、あとはどうでもいいや」
なんてでは、どうにも進みようがない。やはり、
「信ずるということは内的な行為である」
と、私は言っているでしょ。内的な行為である限りは、そこには割り切れないあるひとつの棄身の態勢があるから。難行と言ったって、易行即難行と言っても構わない。難行即易行といっても。これは説明できない。現実は決して一つの言葉で説明できない。説明できたら、それはちょっと現実からズレている。多少観念化してしまう。
「本当の現実というものは割り切れないものである」
とはヘーゲルの言葉だ。ヘーゲルは分かっている。割り切れたら、もうそれは本当の現実ではない。我々は、信仰の現実だってそうでしょ。本当の最後の新天新地がくるまでは――我々は救いの確かさは持っている――けれども、現実に本当に救われているという生の現実ではない。これは信仰の現実です。信仰の現実だから、死に至るまで危機性を持っている。危機性を持っているからといって、不安になる必要はない。キルケゴールのあの「不安」の概念は、そこが強すぎるから、キルケゴールはちょっと困ってしまったけれども。危機性があるからこそ、いよいよ本願に依り頼むのであって、それを不安としたらいかん。本当の平安が来ている。現実は客観視すれば危機性をもっている。もしそれが割り切られてしまったら、みんなはもうまるでキリストみたいな人になってしまう、現実に。ところが、残念ながら我々は罪びとである。パウロですらも、
「ああ、われ悩める人なるかな、この死の体」
と言っている。
「我は罪びとの首」
と言っている。だから、人のことをどうのこうのなんて言っているのはお気の毒さまですよ。黙って荷なう人。人をも荷ない、自分をも荷なっているんだ。自分をも荷なう。
「自分を自分が荷なう」とはどういうことですか。自分の中にあるキリストが荷なってくれる。しょっちゅう荷なわれている。荷なわれながら荷ないつつという。もうどうにも説明しようがないな。……
法然のは「専修念仏」という。専ら念仏を修める。専修念仏は、法然はどうしても信の力が強い。『一枚起請文』でも、
「ただ南無阿弥陀仏と言えば往生する」
という。「往生」という言葉はいい言葉だね、往きて生きるという。私が死んだら、「往生した」と言ってくださいよ。あちらへ往って生きますから。
「小池先生も遂に死んだか」
なんて言わないで（笑）。「往生した」と言ってくれ。
親鸞の方は、「本願回向」という。この本願回向というのは素晴らしい言葉だね。これは

恵みの世界です。天は恵。地は信。恵信一如という。恵みがあるからといって、ボヤッとしてたらダメだよ。恵みにこっちが乗っかって行かなければ。だから、恵信一如という。天は上から降ってくる。地は下から天を仰いでいる。恵は天的な方、信は地的な角度。天地応ずる、もちろん両方なくては。

「往相還相」という言葉がそうです。還る、それから上から回って来るんです、「回向」とは。上から回って、上へと通じて、それから下へ救いが伸びてくる。この本願回向の角度が大事です。我々は本願回向の角度を身に体してしていく。本願回向の媒介者となって身に体していくことが、これが本当の伝道です。皆さんが本当の、一番言葉の深い意味における伝道者なんです、人を愛する、救いあげるということは。

「一々の光明あまねく十方の世界を照して、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず。
　我も亦かの摂取の中にあれども、煩悩眼を障へて見ること能はずと雖も、大悲倦きことなくして、常に我身を照したまふ」

と。そういう本願の中に、大慈大悲の中に入って行くというわけです。そこらの第一流の坊さんのものは読むと楽しくなるね。それは私たちはキリストの光で読むから。

「仏教はどうだ、この点はどうだ」

なんて、そういう妙な変てこな批判で読まない。みんなこれをこちらが摂取してしまう。

●第31歌「起きよ」

それから、第31歌「起きよ」。

1　起きよ、東海の濤のうへに
　　栄光の日を待ちわびながら
　　暗黒に臥して喘ぐ島根よ。

と言って、日本に対してこれだけの精神史を持っている日本であると。だから、

「この福音をもって目覚めろ、この先輩のあとを継げ」

というわけです。

4　起きて、今こそ光をはなて！
　　なんぢの光はつひに差しきた、
　　朝日はなんぢを照らしはじめた。
7　なんぢみづからを生き再らしめ
　　世をもあらたにかがやかすべき
　　神の栄光はなんぢに臨んだ。

先生は、この31歌「起きよ」を歌うときに、旧約聖書のイザヤ書60章を同時に解説している。イザヤ書60章が正にその背景となっている。

「1**起きよ ひかりを発て なんじの光きたり エホバの栄光なんじのうえに照り**

出たればなり」（イザヤ60・1）

ここのところをずっと、これを日本の現代に対する希望として特に先生はそれからつかまえて書いている。先生のは、聖書の註解でも何でもない。聖書の言葉を使って、自分の今言いたい事を言おうというわけです。感想でもなければ、註解でもない、何とも言えないものです。藤井先生のやり方は大抵そうです。そこの19節に素晴らしい言葉がある。

「19 **昼は日ふたたびなんじの光とならず　月もまた輝きてなんじを照らさず　エホバ永遠になんじの光となり　なんじの神はなんじの栄となり給わん**」（イザヤ60・19）

これは黙示録に同じ言葉が出てくる。神と羔が光になるという。黙示録にはやはり旧約のイザヤ書とかエゼキエルなんてのが大いに反映している。

私はうちの次男の名前をここからとってやったんだけれども、60章1節から。「照雄」というのは、「照り出たり」から。どうも、子供たちは親の本願を知らなくて困る。私は家の人たちを本当に福音に、この同じ信仰にもたらすことができないのは、伝道者として資格がない。いつでも「お前、止めろ」といえば、いつでも止めますから。どうぞ、誰か「止めろ」と言ってください。まぁ私みたいな野郎が聖書の講義をしているなんて、およそおかしな話ですよ。どうぞ、人間小池なんかもう塵芥と思ってください。

それから、インドや支那のことがちょこちょこ出ている。

34　しかし大いなる聖手によりて
　累紲はやうやく断ちきられた、
　日本のバビロン俘囚は終った。

……

43　なんぢかつ見て怪しむであらう、
　海の財はなんぢに聚まり
　陸の富またなんぢにつどふを。

46　インドの誇り、黄金と象牙
　沖をかをらす薫物の料
　原始の森のふかき哲学、

49　大野の支那のもろもろの穀
　無為かつ自然、そらをゆく道、
　気韻生動、かたちを見ぬ技、

52　みな聖められ完うせられて
　神への献げものとなるため
　なんぢの所有にうつるであらう。

なんてな、老子の思想をここのところに持ってきた。

もう日本のバビロン俘囚（ふしゅう）は終わったということは36行のところに書いてある。「今こそ立ち上がれ」というわけだ。何といったってしょうがないよね、本当に福音を受けているのは数えるくらいしかいないんだから。先生は理想を掲げてもこれに、

「笛吹けども踊らず」

というわけだ。内村先生も藤井先生も、笛吹けども踊らずと。先生の言葉の中に、

「今や日本は福音を要求し、福音は日本を要求する。キリストの福音を受けいれずして日本は行き詰まりである。」

とある。日本は福音を要求すると。今、日本は福音を本当は本質的には要求するわけなんだが――実は現実には要求してませんよ――けれども、日本は福音を要求するべきときなので、また福音は日本を要求する。今こそ日本人を使おうと福音の方では思っている。だから、キリストの福音を受け入れなかったら、日本は行き詰まりますぞと。

「同様に日本を立たしめずして、キリスト教も世界歴史の行き詰まりである。そうではないか。この私の観察は誤謬（ごびゅう）であるか」

という、烈しい言葉がある。キリスト教も世界歴史も正直、今は精神的に行き詰まっているでしょうが。

「日本を立たしめずしては、行き詰まりだ。その日本のクリスチャンはそれだけの自覚をしないでどうするか」

というわけだ。絶叫ですよ、藤井先生の。ええ、みんなしっかりしてくださいよ、命懸けで。青年に命懸けの気魄がなかったら青年ではないからね。……そういうわけで、

「日本を立てずしてはもはや世界歴史は行き詰まりである」

我々が立たずしてはという藤井先生のこの言葉はよく肝に銘じておいてください。日蓮が、

「我は日本の柱である」

と言った。あなた方は世界の柱だ。世界の柱石。大変なことになったね、これは。しかし、それは棄石となっていいよ、棄石で。私は「棄石」という言葉が好きだ。私はもう棄石。これからは私の号は「天鐘」も「天晨」もやめて「棄石」にしようかな。もうみんなに棄てられて結構なんだ。その代わり一番どん底に立ちたいわけだ。なにしろ、いっぺんしかない一生ですからね、あなた方は本当に打ち込んでくださいよ。

64　をちこちその目を放ちながら
　　人のいとなむとかくの業（わざ）に
　　なぞらふならひの猿のごとく

67　なんぢも長くこの日ごろまで
　　いたづらに他（ひと）のわざをわざとし
　　その糟粕（そうはく）を嘗（な）めつつは来た。

日本人は模倣的なことをずいぶんやって来ましたが、「もういい加減にしなさいよ」という

わけだ。

70　しかし一たび入りてやどれる
　真理はなんぢに植えつけるであらう、
　曾(かつ)て見ざりし独創の種を。

「独創的な創造的な人間となる、このキリストという真理が入ってきたら」と。「真理」というのは、私は「キリスト」だと言いたい。さっきの讃美歌で、「神によりて平安がある」と歌っていたね。あの「神によりて」は、我々は「主によりて」だ、「主によりて安きが我々にある」ということ。これは、私は讃美歌を作らなくてはいかんな。

73　目ざましき華(はな)はかくてひらき
　万国の民を誘(いざな)ふであらう、
　王たちもきたり仕ふるまで。

76　なんぢの門は世界にむかうて
　つねに開かれ、よるひる閉ぢない、
　巡礼者たちの入りくるために。

これは先生は夢見ているわけだ。日本人は本当に優れた国民なんですよ、正直ね。何といったって、世界第一級の国ですよ、才能からいっても何にしても。残念ながら、魂の世界だけが掘り下げが足りない。非常にいい素質を持っているんだ、日本人というのは。だから、そういう意味において本当に自重しなくてはいかん。言葉の正しい意味において自らを重んじなくては。先生のこの詩だって独創的なものだ。

127　ああなぐはしき日のもとの国、
　朝にのぼりて夕にしづむ
　造られし世の球にはあらぬ
　出でてはふたたび入ることなき

130　とこしへの義の太陽こそは
　なんぢが名に負ふその日とぞ知れ。

「義の太陽」というのは、「義」とまで限定しない方がいい。永遠の「霊の太陽」だ、本当は。そこのところは藤井先生のまだちょっと限界があるんだけれども。少し観念的な言葉に囚われ過ぎている。「義」と言おうが、「愛」と言おうが、「仁」と言おうが、「慈悲」と言おうが、もう渾然として実は名状しがたきものです。まだ分析の世界ではダメなんですよ。もう名状しがたき、それは正に無限無量、無名(むみょう)、名が無い。それはあるときは「義」と言うでしょう。あるときは「愛」と言うでしょう。あるときは「霊」と言うでしょう。あるときは「忠」と言うでしょう。あるときは「聖」と言うでしょう。いいですよ、何と言っても。

それはひとつの観念の世界の、言葉の世界の、現象面で本質をあらわす。例えばダイヤモンドは無色だね、ところが太陽の光が当たるとキラキラ光る、あのダイヤモンドの表面

がいろんな光に光る。実は本質は無色。無色無限色。即ち、無名無限名なんだ――「無名無限名」なんて今日初めて言う――名が無いんです。無名こそ無限の名を持っている。

だから、私は自分の号を時々、「天晨」と言ってみたり、「天鐘」と言ってみたり、「彼岸（飛雁）」と言ってみたり、今度は「棄石」と言ってみたり。いろいろ言いたくなる、その表現を。一つにこだわらない。

133　中空わたる大き小き
　　双輪（もろわ）はひとしく輝きうせて
　　真昼にのぞむ蝋燭（ろうそく）のごとく

136　ただ神はなんぢの光となり
　　イエスはなんぢの栄となりて
　　夜昼なんぢを照らすであらう。

139　そのとき、日本よ、わが愛するものよ、
　　私は初めて見るであらう、
　　真理の国なるなんぢの姿を。

142　――なんぢの民みな義者となりて
　　神の植えたる樹株のごとく
　　その聖栄（みさかえ）をあらはしつつも。

145　ああこは私の夢である乎、
　　否かを知らない。ただねがはく
　　聖名（みな）のゆえもてせつにかくあれ！

というけれども、ダメなんだ。

●第32歌「幻滅」、第33歌「地はおののく」、第34歌「開けたる門」、第35歌「微温」

そこで第32歌「幻滅」という詩をこの次は書いてしまった。ちょっと幻滅は早すぎたかもしれないが、しかしその幻滅なんだ、正直ね。しかし、その最初の三行、

1　愛は直観する、愛は予見する、
　　愛はその心にいだく者の
　　理想のすがたを幻にみる。

4　この年ごろ私は幾たび
　　新しき日本の夢を見たか、
　　日本よ、なんぢは私の愛である。

素晴らしい句ですね。だから、いくら幻滅でもいいと。もうひとつ先を見ようということがここに表れている。それから、富士山のことが出たり、いろいろしてますが。とにかくしかし、政治の世界もしょうがないし、国民の生活もどうのこうのと、相当ひどい表現が

書いてあるよ。

112　ひとり怪しむ、天よりの啓示
　　永遠（とこしえ）の生命（いのち）のおとづれのみ
　　拒みてこれをうけぬは何ぞや。

これだけは受けないで、

106　明治、大正、半世紀あまり
　　議会に、銀行に、はた大学に、
　　キネマに、ラヂオに、はたスポーツに、

テレビは出てないか。

109　いみじくもなんぢ受入れしかな、
　　西の国土に咲きみだれたる
　　色さまざまの文明の花を。

みんな受けたけれども、ただ一つ天の啓示を受けない。それは怪しむべきこと。

115　ああわが若き日本の友らよ、
　　なんぢらの胸に悩みはないか、
　　罪のもだえの涙はないか。

118　オリブの山のみねよりひびく
　　人の子の声になんぢら泣かぬか、
　　イエスの笛になんぢら躍らぬか。

121　もしくはおほむねなんぢらのうち
　　一たび十字架のもとに来り
　　聖名（みな）を唱へぬもの少（すくな）しとせば

124　何ゆえ安き価のゆえに
　　また踵（くびす）をあげ、彼を売るか、
　　ああ背教者ども、ユダの裔（すえ）よ。

と。一向笛吹けども躍らずという。まぁ私が一年間、相当脱線しながら講義をしても、本当に飛び込んでくるやつはいない。今ここにいる人はかつて飛び込んできたけれども。

139　日本よ、腐りたる屍のごとき
　　なんぢの頽廃を私は憎む。
　　または身をひさぐ処女のごとき

142　なんぢの不貞を私は怒る。
　　なんぢの名を復た私は呼ぶまい、
　　なんぢと私と、何の関（かか）はりか。

145　ああわが国、わが愛する日本、

なんぢはかくて滅びるであらう、
もしただ神の憐憫(あはれみ)なくば。

一番終わりにそう書いてある。これでは滅びてしまうと。正直、いっぺん滅び的なところへ来てしまったよな。これは内村先生も予言してしまった。日本はいっぺん引っくり返るという。この福音を受けとらなければね。「ただ神の憐憫なくば」と。

今は本当に困ったものですね、特にテレビなんてものは。……こういう商業主義に毒せられている。とにかく、政治も悪いし、教育も悪いし、しょがないね。悪いことが分かっていながら、これが直らないというのは、直そうとしないというのはどういう国民ですかね。また大学問題で文部省とガタガタガタガタやっているが。

第33歌「地はおののく」で、これは大震災のことが書いてある。これは神の天譴(てんけん)が来たという。

第34歌「開けたる門」。そこにまた仏教、孔子、老子、荘子ということがまた出てくる。

第35歌「微温」にくると、キリスト教会がいかに微温であるか、ラオデキヤの教会みたいにダメかというわけで、キリスト教会のダメさ加減が書いてある。

●第36歌「呻き」

そして、聖霊の呻きのことが第36歌「呻き」に出てくる。

43　「まだ顕はれぬか、私の望み
　　聖き新婦(はなよめ)、こひつじの妻は、
　　その夫(せ)の君のために飾りて。

……

61　顕はれよ、疾(と)く、私の望み
　　聖き新婦、こひつじの妻よ、
　　なんぢの夫(おつと)のために飾りて！」

……

76　彼女の生命(いのち)、今はひそかに
　　人目もおよばぬ深淵に似たる
　　神のうちらにひそみてあれど
79　知るものぞ知る、いかにも深くも
　　宇宙の根にさへとどくほどの
　　歎きは彼女の胸にあるを。
82　おもへ、いづれの心臓の動きか
　　なほ満されぬきよき処女(をとめ)の
　　こめたる思ひ一つに如(し)かう。

というのが、新婦の即ちキリスト教徒の中の特に深い人たちのことがそこに歌われて、そしてそれが聖霊の呻きと相通じて待っている、というわけです。そして、

106　「アーメン！　速(すみや)かに来りたまへ！」
　胸の奥なる至聖所にてか
　薫物(たきもの)のごとく、第三の呻き。
109　「アーメン！　速かに来りたまへ！
　羔(こひつじ)よ、教会の新郎(にひむこ)よ、
　なんぢの佳耦(とも)の願ひに応へて。
112　なんぢはアルパである、オメガである。
　最先(いやさき)である、最後(いやはて)である。
　始である、また終である。
115　太初(はじめ)に神とともにいまして
　聖名(みな)の永遠(とこしへ)の讃美のために、
　なんぢはみづから創造(つく)りたもうた、
118　人を、万物を。而してさらに
　滅亡(ほろび)よりこれをあがなふために
　おのが生命(いのち)をさへ捨てたまうた。
121　さらばみわざをすべて成就し
　かぎりなく潔きなんぢの佳耦(とも)を
　つひにみまへに建てたまふべく
124　アーメン！速かに来りたまへ！
　羔よ、教会の新郎(にひむこ)よ、
　なんぢの佳耦(とも)の願ひに応へて。」

キリストの再臨に対する祈り。最後は聖霊自らの祈り。一番終りはそれで終っている。

136　大いなるものの初穂を受けて
　なまじひになやむ新婦のため
　その息づきを和らがしむべく
139　聖霊みづから軛(くびき)の下に
　身を投げ入れて、落ち懸かりくる
　重みをことごとく声に換へた。
142　かくてひとりの女性を中に
　造られしもの、造られぬもの
　地につけるもの、天よりのもの
145　見よ、みな呻き、呻きに呻く、

いはく「顕はれよ！」「来りたまへ！」
「アーメン！　速(すみや)かに来りたまへ！」

――中篇　完――

●下篇「饗宴」第1歌「雅楽」、第10歌「棕梠」、「続稿（断章）」

それで、「来りたまえ」であるので、それから今度は「饗宴」です。「饗宴」と今日の題に書いたけれども、「饗宴」のところには時間的に今日はとうとう来ない。

下篇「饗宴」は15歌まであります。これは皆さん、本をお持ちですから、あとはお読みくださいということで終わりますけれども。

第1歌「雅楽」は、藤井先生はいつも各篇の第1歌は奥さん〔喬子(のぶこ)〜1922/10/1　29歳〕との関わりのことを、個人的なことを相当強く出しておられる。自分もどうも奥さんに会う顔がないから、「赦せ！」なんて書いてある。まぁ藤井先生も人間ですから、

34　ああ泥濘(ぬかるみ)に着きて離れぬ
　豚のたましひ、ああ切り剖(さ)かれ
　なほ死にきらぬ鰌(どじょう)のこころ。

37　「赦せ！」涙して私は呼ぶ。
　げにわが半身ながら私は
　彼女の赦をこはねばならぬ。

40　彼女は必ず赦すであらう、
　而してわたしの重き軛(くびき)を
　もろともに負ひくれるであらう。

なんて、深刻な言葉が書いてある。まぁ生身(なまみ)の方でありますので。しかし、非常に自分たちの婚姻を通して神の啓示にあずかったという、また積極的な面も書いてありますが。

あとは、黙示録を逐次歌っているわけです。黙示録はもうやりましたから、いちいち当たっていきません。あなた方はお読みになれば、「ああ、黙示録のあそこだな、ここだな」とわかるわけです。

第10歌「棕梠(しゅろ)」というところがある。これは黙示録第7章の有名なところで、そこに白衣の大集団のことが出てくる。第4連。

それから、第7連の127行をちょっと読んで、あとちょっとでお終いにします。

127　ああ秋の野の野草にやどる
　白露のごとく今この山に
　数へつくせぬ顔また顔の

130　いづれ一つか地にありしころ
　腸(はらわた)よりぞ沸きしとおもふ

133　涙の痕をのこさぬがあらう。
　その源を封ずるために
　人の手はあまりに短きを
　験(けん)して彼らはつぶさに知った。
136　おのが心の的(まと)に触れえぬ
　空しき逸矢(それや)を蔑(さげす)みつつ
　地の慰めをかれらは拒んだ。
139　ただやはらかき「時」のなだめに
　暫(しば)し思ひを遠ざくるとも
　何か癒えよう、傷そのものは。
142　さはれ嘉(よ)き日はつひに臨んだ、
　涙の壺を創(つく)造りたまひし
　能はぬことなき聖手は今のび
145　見よ、あふぎみるすべての眼より
　涙ことごとく拭(ぬぐ)ひたまへば
　ほがらかに眸(ひとみ)みなかがやく。

といって、誰もがみんな心の涙を持っていると。しかし、天界においてそれがぬぐわれるという、非常にこれは素晴らしい文句だと思います。

それで先生の臨終の床(とこ)の所に、机の上に置いてあった遺稿がある。それが「続稿（断章）」というところ。そこに、

1　よろづのものの終(おわり)につける
　奥義はつひに曙(あけぼの)のごとく
　立ち現はれて成就すべき
4　その時いたる。ためしなきまで
　いと高らかに響きわたらせ
　第七の天使(みつかひ)はラッパを吹く。
7　ああこれ地にて聴くことを得る
　最終(いやはて)のラッパ。「時」はかへりて
　また永遠に入るべきの合図。
10　先の二つの禍害(わざはひ)に増す
　第三の禍害、地に住むものら
　哀哭歯噛(かなしみはがみ)することであらう。

「先の二つの禍害(わざはひ)」が即ち第一次戦争、第二次戦争とするならば、ちょうどそれに歴史的に応じる第三の禍害という。もし、第三の禍害、世界戦争が今度きたら、即ちこの地球は、

全地は、世界は滅びる。第三の禍害をもし来らせるならば。しかし、もう今は本当に不信の時代です。信仰はないですね、もう。

「末の世に信を見んや」

という。クリスチャンなんて言ったってもう、ろくなクリスチャンはいない。「ろくなクリスチャン」ということは、立派なクリスチャンのことを私は言っているのではないですよ。本当に本願を生命としている、キリストの本願を生命としているクリスチャンです。今はもう不信の世界です。

なかなかこれが受けとれない。もう、すぐ頭です、すべてが頭です。いわゆる入り口的な思想が非常に強い。単なるヒューマニティでもどうにもならん。まだヒューマニティはいいですけれども。いっさいのイデオロギーを超えた世界、イズムを超えた世界、どのイズムも全部掌握（しょうあく）してしまう世界。ただ否定するのではない。そういう福音の、いろんな人間の、個人にしろ社会にしろ国家にしろ、それからそういった主義主張にしろ、全部これを包括してしまうところのもの。だから、クリスチャンは本当の意味において真理の世界のコンダクターなんです、みんな。全部これを掌握する。我々の福音はこれができるんです。仏教であろうと、儒教であろうと、何であろうと、全部これを。

そういう本当の世界を私は表現しないことには、死ぬわけにいかん。どうぞ、皆さんも大いに志を立てて進んでください。おわります。お粗末でございました。

〔文庫編集者註：詩の原文引用は藤井武選集第一巻『羔の婚姻』（昭和32年7月1日岩岡書店刊、編輯者 矢内原忠雄、小池辰雄）による。ルビは適宜加えた。〕

●（参考一）夫人の死と『羔の婚姻』

大正11年（1922年）3月から、藤井武は東京市内に進出して、神田基督教青年会館で、日曜ごとに聖書の公開講演を開くことになった。彼は正に「人生の旅路なかば」（35歳）、好調な前進をつづけつつあった。

しかし、健闘また健闘の夫君を全愛全力を傾注して内助するかたわら、五人の子女を育てつつあった夫人の荷はじつは過重であった。その重荷を欣然としてほほえみつつ、荷なっていた夫人であったが、ついに限界に来たのをいかんせん。4月21日夫人の胸は破れた。鮮血を吐いたのである。夏がすぎて、ついに彼は神田の集会を閉じた。コスモスの花が天的な微笑に咲きそめる頃、10月1日の夕暮、夫人の香魂（こうこん）は天界に昇った。彼は号泣した。天地晦冥（かいめい）である。

告別式は10月3日に九段坂上のメソジスト教会堂でいとなまれた。式辞の中で内村先生が

「私どもは神様のみわざを義としたてまつるべきであります」

と言われたとき、彼の魂は電撃されたごとくなった。

「新しい光が私を叩きつけた。アーメンという声が胸の中にひびきわたった」

と彼は「10月1日感話」の中で語っている（『旧約と新約』100号）。

夫人の死は、彼にとって舵（かじ）が折れたようなものである。彼は舵なき舟をどのようにして進ませたか。その後の舟路八年の力漕は、彼女が天上から送った天つ風を帆に受けた助力によった。ここに内村先生の、「藤井喬子（のぶこ）を葬るの辞」の一節を引用する。

「しかしながら彼女は死をもってして、生をもってしては、とうていなすことのできない援助を藤井君になさんとしているのであります。はなはだ失礼の申し分でありますが、私は私の実験より申し上げます。喬子さんを天国に送って藤井君は本当の伝道師になられたのであります。藤井君は今よりは理想を語るにあらず、研究の結果を語るにあらずして、真に見しところのものを語らるるにいたり、その結果たるじつに前日の比にあらざることを実験せらるることと信じます。今よりのち、ビヤトリスがダンテを助けしように、喬子さんが藤井君を助けらるるのであると信じます。喬子さんは決しておのれのために死んだのではありません。主のために死んだのであります」。

先生の言のごとく、その後の彼は、見しところを語る人となった。彼ははじめから理想を現実に生きんとしていた魂であったが、今や天が地の如くなってきた。地には夫人と共にひとたび死んだ彼である。

祝福された結婚生活は、彼自身がその自伝で語る如く、「はじめから神聖」であった。「余りにも神秘なこと」であった。「地のことではなくして天のこと」であった。「血肉のことではなくして霊のこと」であった。

「彼女は私に何であったのか」

「実際彼女が妻たるの従順を示し、女性たるの貞潔を現わすときに、それにまさりて私を栄光づけるものがどこにあったか」

「彼女は私を満たすものであろう。すなわち私のプレーローマ（満盈（まんえい））である」。

彼は神の声を聞いた、

「武よ！　汝の足から下駄をぬげ。汝が立つ地は聖き地である。私の園にかたどった園である。私が私の妻なる召団（エクレシヤ）について思うところを、汝は汝の妻について思うのである」。

かくして彼は新郎としての羔（こひつじ）を見た。また

「神のふところの中心に分け入って、宇宙のいと深きを秘密を見た」。

彼は天地創造が「羔の婚姻」の序曲であることを悟った。人類の歴史は、新婦たるエクレシアの潔めの過程であることを知った。

「いっさいの根源に聖なる愛がある」

ことを見た。

「永遠に変わらざる羔の真実と完うせられたる新婦の貞潔と、この二つのものの相抱くところに新天新地は生まれようとする」

聖書の啓示史を洞察した。今やこの祝福されたるおもいが、夫人を天上にもぎとられ、血の洗礼を受けて、彼の畢生（ひっせい）の讃歌、「新しき歌」として、『羔の婚姻』なる題名のもとに、１９２３年の４月から『旧約と新約』誌の巻頭に連載されることとはなった。

第一歌「コスモス」の篇にうたっていう。

讃むべきかな、ひとつの十字架もて
　あるいは撃ちあるいは贖い
　かくて永遠のみむねを成す者！
福（さいわ）いなるかな、召されてみそばに
　聖きよろこびを充たす彼女は！
　聖名のゆえに軛（くびき）負う私！
ねがわくはそこに彼女をして
　ここに私をして暫（しば）しありて
　合唱せしめよ、汝の栄光を。
汝、いと高き愛、とこしえの義、
　汝にむかいて我らはうたわう、
　新らしき歌を、『羔の婚姻』を。
わたしは素（もと）よりダビデではない。
　またダンテでもない。しかし如何せむ
　黙さば石か叫ぶであろう。
おお父よ、子よ、聖霊の神よ、
　わたしを聖めよ、わたしを強めよ、
　私の歌を完（まった）からしめよ。アーメン。

爾来（じらい）八星霜、彼が地を去る日まで、『羔の婚姻』に彼の生命と生活とは集注されていた。この詩を中心に、彼の思索も研究も聖書の解説も動いていた。実にこの詩は彼の生命の呼吸であり、祈りであり、告白であった。また戦いであり、いっさいであった。ダンテの『神曲』、ミルトンの『楽園喪失』、クロップシュトックの『救世主』、藤井の『羔の婚姻』を世界四大宗教叙事詩と称することができよう。純文学的価値において前二者は言わずもがなではあるが、詠（うた）われた内実の福音的な価値、雄渾なる聖書史観の点において『羔の婚姻』は独一の地歩を占むべきものである。これは叙情味豊かなる叙事詩というべく、天地創造より新天新地の到来にわたる史詩である。

『羔の婚姻』が書きはじめられた大正12年（１９２３年）といえば、その９月１日に関東は

大地震に襲われた。彼はそこに神の日本に対する警告乃至審判の聖手を見た。彼の眼は歴史的乃至自然的事象において神の摂理を洞察せんとしていた。ヘブライの預言者の魂と相通ずるものであった。

そして日本が神の歴史においていかなる地位にあるか、いかなる使命、課題を負わされているかを考察し、洞見した。キリスト教的見地から見た神の救済史において、「第一文明」たるギリシャは神の本質の問題を、「第二文明」たるローマは、人間とその罪の問題を、「第三文明」たるドイツは救贖の問題を、それぞれ中心課題として歴史的に展開してきたが、「第四文明」として日本は来世問題を課せられていると彼は観た。

その来世問題をとりあつかうにあたって、彼はその裏づけとして日本の精神史を鳥瞰した。『聖書より見たる日本』と題して１９２９年２月に岩波書店から出版した一連の論文集がそれである。しかし彼のそのような著書もすべて彼の『旧約と新約』誌上において発表したものである。彼は日本の精神史の過去を顧みて、そこに福音を受くべきいわば旧約的なものを見た。『羔の婚姻』中篇「新婦」、第三十歌「産痛」がその消息を歌っている。彼が現代批判において明治大正文明を総じて「無宗教無道徳文明」ときめつけているのはいささか酷にすぎるきらいはあるとしても、いよいよその傾向をあらわしてきた昭和文明への預言的な宣告としてひびくのである。

「優しき心情は深き仏教に応じ、聖き道念は正しき儒教に従い、聡き知慧は博き科学に答えて、探求また探求、修養、実験また実験」

の歴史的苦闘をつづけて今日に至った日本ではあるが、未だほんとうに精神的充満をもたらすものを受けていない。

「罪のなやみを癒やすこと浅くして康からざるに康し康しというものは仏教であった。永遠を慕う心のまえに余りにめでたきは儒教であった。寂しきは信仰なく道徳なきの日。感情は我らを溺らしめ、意思は我らを化石せしめ、理性は我らを浮き漂わしめた。平安に真理なく江戸に生命なく、東京に道はない。我らはパンを求めて石を得た。我らは魚を求めて蛇を得た。……感情と意思と理性との上に全人格を限りなく発展せしむべき永遠の霊的生命はないか。我らのために道たり、真理たり、生命たるものが、なお何処にか存在しないか」。

かく語って彼は言うまでもなく福音のほか、キリストのほかに日本人の求むべき精神的支柱なきを告げ、しかもキリスト教を受けてその歴史的使命は、日本人固有の特質たる神秘的直観の力を福音によって活現せしめられて、いわばヨハネ的福音、ヨハネ的黙示の世界を開示し、福音的な光をもって東方より全世界を光被せんとするにありと洞察した。そこに日本をもって現わさるべき第四文明の華があると観た。

「ああ東洋よ、東洋の日本よ、源信、法然、親鸞の子孫よ、世界は今や汝を要求しつつある。第四文明は汝の手によって起こらんとしつつある。神の国の真理は汝

の開拓によって完うせらんとしつつある。望むらくは神の賦与したまいし汝の古き特性に目ざめて、今より高く来世永遠の光明を点じ、もって万国の民を大いなる希望の生活に導かんことを」。

彼はイザヤ書第60章に因んで、「栄光の日本」を望見した。

「西洋文明の粋が日本に集まり、復興したる東洋文明とともに渾然と融合して、神の聖名のために献げられる日が来るであろう。今は西洋文明もまた神より離れて、甚だしく堕落している。復興を要するものはひとり東洋のみではない。全世界が何処かに新しき信仰的中心を見いだして、そこにむかって帰一せねばならぬ。日本がその過去に於て示したる深遠なる来世観念をもってキリストを迎え、教会史上かつて見ざりし新しき栄光に輝く時、その時こそ西洋もまた東洋と共に復興して、世界の文明が最後の目ざましき光彩をはなつ時ではあるまいか」。

福音の最終段階たる終末論的課題に着眼した彼の魂は、日本の使命を思うてかくまで高揚はしたものの、現実の日本を直視するとき、その不信不義の世相のゆえに、憤怒（ふんぬ）と慨嘆（がいたん）に痛み、ついに「亡びよ」という逆説的な詩を書いて愛する祖国のため憤りかつ嘆いた。

『羔の婚姻』の中篇「新婦」第三十二歌「幻滅」において、彼が怒りかつ嘆いている詩句は、その後第二次大戦を経て23年の今日この頃のわが国の現状にふさわしい文字である。

〔小池辰雄著作集第6巻『随想集』第二部　偉大な野人　一〇、藤井武と『旧約と新約』（其二）夫人の死と『羔の婚姻』から転載〕

●（参考二）『羔の婚姻』解説

本選集第一巻『羔の婚姻』は、上篇「羔」、中篇「新婦」、下篇「饗宴」の三部曲を以て構成される一大詩篇である。「羔」は神の子キリストを意味し、「新婦」はキリストの救にあづかる人類を意味し、「饗宴」は歴史の終末に於ける神の国の祝福された両者結合の歓喜を意味する。

『羔の婚姻』といふ題名は、ヨハネ黙示録第十九章の

「羔の婚姻の期いたり、既に新婦みづから準備したればなり、」（七節）

及び

「羔の婚姻の宴席に招かれたる者は幸なり、」（九節）

から得たものと思はれる。

本詩の主題は、宇宙と人類の創造と堕落、これを救はんとする神の経綸とその実現による神の国の完成にある。このため著者の題材としたところは創世記から黙示録に至るまでの全聖書と、神の選びの民らの歴史的展開である。即ち「羔」篇に於てはキリストの降誕に関する旧約聖書の預言くりひろげ、福音書のイエス・キリストに及ぶ。「新婦」篇に於てはペンテコステを以て始まるエクレシヤの歴史の展開を歌う。その間、日本の世界精神史

的地位と使命についての深き洞察を歌った切々なる憂国の詩句は、現実の日本に対する一大警鐘といふべきである。「饗宴」篇に於ては主題を専ら黙示録にとり、世界の終末的審判と新天新地への大希望を歌はうとして筆を進めたが、詩歩未だ半ばならずして著者は天に召されたのである。ときに一九三〇年七月十四日であった。

著者がこの偉大なる主題の一大叙事詩を書くに至った起因は何であったか。殊に神の国完成の経綸を、キリストとエクレシヤの「婚姻」として把握したことの背景としては、聖名のため純潔にして最も祝福された十年の結婚生活を営んだ後、突如その愛する妻を天に召されたことに発する。生死を越えての永遠的貞潔の貫きに於て著者はキリストとエクレシヤとの関係を見、「羔の婚姻」を以て表現されるところの聖書史観の秘義をば、自己の人生の血涙を通して体認させられたのであった。

著者がその妻を天に送ったのは一九二二年十月一日であった。（本選集第九巻所載「天国に善き場所を備へて」参照）、彼は妻と共に地に死に、天に生きる者となった。天地はしばし晦冥であったが、暗雲を破ってさし臨む天来の光に霊感されて構想成り、いよいよ「いと高き愛、とこしへの義」なる救主キリストの「聖名に栄光」を帰しまつるべく、詩筆を執り始めたのは翌一九二三年の春復活節の頃であった。妻のぶ子の告別式において恩師内村鑑三の述べた一言が、彼にとりて天来の霊感となったことは、彼自ら歌った次の詩句によって知られる。

「祝福（めぐ）まれしもの私を去りて
　わが魂（たま）うつろとなりしときに
　一つの声がわたしを満たした、
いはくべアトリチェ逝きてダンテを
　助けしごとく今よりぞのち
　彼女はなんぢを助くるであろうと。
なんぢを私に想ひ起させて
　かく慰めし人に祝福あれ、
　聖婚の詩はその日孕まれた。」

（「新婦」篇第二十一歌「星より星へ」より）

この詩は一九二三年四月以降、月ごとに著者の個人雑誌『旧約と新約』の巻頭に掲げられた。この詩は著者の全生活から迸り出でたる全人的告白であって、その研究と思索、生活と祈祷の渾然たる結晶である。いづれの歌からも著者の魂の呼吸と心の鼓動を聴くことが出来る。毎月著者の祈と精力の大部分はこの詩のために傾注され、自ら誌上の散文はこの詩の註に過ぎないと語っていた。彼の手から突如ペンが落ちた日まで、この詩は彼の全生活と共に戦った。下篇第十五歌につづく未完成の「断章」が、彼の絶筆に外ならない。

本詩各篇の内容詳細については、各篇冒頭の「解題」を参照されたい。いづれの「解題」

も全集のものをそのまま転載した。

本詩の形はダンテの『神曲』に類似し、三行一聯、数聯一節、数節一歌、三十六歌一篇、三篇全詩の構成である。（原詩では節と節との間は空行であるが、編者は便宜上その空行に節の番号を附した）。各行の字数は十四乃至十五字を中心とし、文語調に口語調を交へた独特の格調である。各歌は七聯七節一四七行が基準であるが、一定はしていない。詩の範疇から言へば、ホーマー、ダンテ、ミルトン、クロップシュトックの大作の如き大叙事詩である。一歌々々がある意味では独立の詩篇をなしつつ、大いなる有機的構造を成している。

上篇は三六歌、一八一七聯五四五一行。中篇は三六歌、一七四五聯五二三五行。下篇は一五歌、七〇三聯二一〇九行。合計八七歌、四二六五聯一二七九五行。これに断章と別稿の一歌を加へれば、総計実に一二九五四行の長編である。これをダンテ『神曲』の一四二三三行、ミルトン『楽園喪失』の一〇五五八行及び『楽園回復』の二〇七〇行、計一二六二八行と比較して何ら遜色なく、未完成ながら堂々たる大詩篇である。天若し著者に藉すに更に二歳月を以てせんか、この詩の完成は優に期せられたのであったが、我ら神の深き御意の前に黙す。

更に詩の律動について見るに、日本語の性格上押韻は期し難きところであるが、本詩は旧約聖書（ヘブル）の詩に於ける如く、思想上の韻律、謂はば内的韻律として聯句法を用ひている。著者の愛着措く能はざりし武蔵野の起伏尽きざる風景、松籟のひびき、夏雲の重畳、大洋の五百重波、大空を貫く陽光、それらの優美また哀愁の調、荘厳また雄偉なる相こそ、『羔の婚姻』の備うる韻律であるといへよう。

編者は、この詩の序に代はるものとして、「詩の観念について」という著者の論文を附した。これは著者自らその訳書ミルトン『楽園喪失』上巻に添へた文章であるが、『羔の婚姻』の詩的性格を説明するものとして適切であると信じ此処に転用したのである。その他著者の文章からの二、三の抜粋を附載した。

巻頭に写真一葉を掲げる。著者の肖像写真は、一九二七年晩秋、世田谷の深沢新町なる彼の住居に程近きところ、西方に富士と丹沢山脈を望み得る武蔵野の丘に於て小池が撮影したものである。この丘は著者の祈り場、またしばしば読書執筆の場所であった。

偉大なる詩を有たない日本の同胞に、世界的価値をもつと信ずるこの雄篇を三度び送ることの出来たことを我らは感謝すると共に、この詩によって神の栄光のあがめられることを我らは著者と共に祈願するものである。

一九五七年六月

編輯　矢内原忠雄
小池辰雄

〔『藤井武選集1　羔の婚姻』の「解説」から転載〕